

ついてメソ気象学的な解析を示した。そのような気象状況をもたらすものとして、周囲を山地に囲まれた瀬戸内海を中心とした地域に発生した寒冷な局地高気圧が重要な要因であることがわかった。この寒冷な局地高気圧は、規模は異なるが、盆地におけるものと同様な地上気象現象をもたらすものである。

発生機構については、周囲を山地に囲まれた地域に移流による寒冷な気塊の停滞と前線霧の発生機構にもとづく雨滴の蒸発による冷気層の生成が原因であることがわかった。

さらにこのような気象状況のもとでは、大阪湾を中心に特徴的な気象現象の分布を示す。大阪湾の北部沿岸地帯は強雨域、紀伊水道からつづく南部地域は強風域、その中間地帯は濃霧や大気汚染物質の停滞が顕著な地域である。これは災害気象学的に重要な気象現象である。

この報告は気象研究所地方共同研究の一部として行ったものである。お世話になった気象研究所および大阪管区気象台の方々にお礼を申し上げます。また研究途上で

助言をいただいた京都大学防災研究所中島教授、後町幸雄氏に深謝いたします。

引用文献

- 1) Fletcher, R.D., 1949: The Donora smog disaster-A problem in atmospheric pollution, *Weatherwise*, 2, 56-60.
- 2) Hewson, E.W., 1951: *Atmospheric pollution, Compendium of meteorology*, American Meteorological Society, Boston, 1139-1157.
- 3) Meatham, A.R., 1955: Know your fog, *Weather*, 10, 103-105.
- 4) 中野道雄, 1957: 大阪の大気汚染, 日本気象学会70周年記念論文集, 152-158.
- 5) O'Connor, J.F., 1945: Fog and fog forecasting, *Handbook of Meteorology*, McGraw-Hill, New York, 727-728.
- 6) 志貴泰二, 1964: 春季の兵庫県南部における南風の特性, 大阪管区防災気象文献抄 II 近畿篇, 大阪管区気象台, 237.
- 7) 高松地方気象台, 1966: 異常気象速報, 1, 高松地方気象台.

〔新刊紹介〕

「気象災害論」新気象学叢書(地人書館)の中の一書でB6判167頁, 定価550円, 著者は札幌管区気象台長の高橋浩一郎博士。

これは防災担当者のための実務ハンドブックではなく、看板どおり災害論である、気象台の予報官とか防災気象官は現業の技官であるけれども、どちらかというと物理学者のような人が多い。また天気予報という仕事を通じて大衆に接しているためであろうか人情家が多く、文章を書くときわめて抽象的な内容が多い。気象庁は不思議な役所である。ところがこの気象庁の中で高橋博士は異色の人物であると私は思っている。著者の文章は工学的な性質が強い。

この本も、災害保険論というある意味では冷たい観点からスタートして、オペレーション・リサーチの立場から災害の対象別に誘因・素因・拡大要因を分離し、また統計的な立場から防災のための投下資本と利益との関係を論じている。この本の前半には著者の夢が感じとられ

興味深いものがある。現在防災にも制御理論の導入が真剣に考えられつつあるが、この場合一つのネックは防災は理工学的な一面の他に行政の面が大きく入っていることである。洪水制御のプログラムで下流の大都市と上流の村との防災の荷重のおき方が政治抜きでは考えられない。著者はまえがきでこれにはふれないと述べているが災害論を展開するためにはふれないわけにはゆかないであろう。

また災害論であるからには気象だけに限ることは不可能ではなからうか。著者は気象学者としては数少ない広範囲の知識の持主であるけれども、この本の後半の洪水災害や農業災害の部分は工学や農学関係者から見ればやや物足りないと思われはしないだろうか。むしろ後半の個々の災害の説明はカットして総合的な災害論に徹した方がよかったかもしれない。

著者がさらに各方面の災害関係者に接し討論をされて、より総合的な災害論を展開されることを期待したい。

京都大学防災研究所 中島暢太郎